

韓国人日本語学習者における日本語のザ行 音とジャ行音の習得について —聞き取り調査を通して—

藤田 蘭子*

(e-mail:rankofujital@gmail.com)

<目次>

- | | |
|------------------|---------------------------|
| 1. はじめに | |
| 1.1 本研究の背景と問題の所在 | 3.3 分析方法 |
| 1.2 本研究の動機と目的 | 4. 結果と考察 |
| 2. 先行研究 | 4.1 学習者の日本語レベルによる聞き取り能力の差 |
| 2.1 聞き取りによる調査 | 4.2 ザ行音(ザ、ズ、ゾ)間の差 |
| 2.2 聴覚音声学の観点 | 4.3 ジャ行音(ジャ、ジュ、ジョ)間の差 |
| 2.3 先行研究の欠点 | 4.4 ザ行音とジャ行音の間の聞き取りの差 |
| 2.4 本研究の課題 | 5. 結論 |
| 3. 調査の方法と分析 | 5.1 まとめ |
| 3.1 調査 | 5.2 今後の課題 |
| 3.2 調査協力者 | |

キーワード：韓国人学習者(Korean learners)、言語習得(Language acquisition)、聞き取り(Listening)、ザ行音(Za-gyō-sounds)、ジャ行音(Ja-gyō-sounds)、対照研究(Contrastive study)

第1章 はじめに

第1章では、本研究の背景と問題の所在、本研究の動機と目的を述べる。

* 名古屋外国語大学、大学院生、日本語教育

1.1 本研究の背景と問題の所在

現在、世界では英語や中国語等の様々な言語教育が行われている。日本語教育は 130 の国と 7 の地域で実施されており、日本語教育機関数は約 16,200 機関にも及んでいる¹⁾。また、1979 年から 2015 年までの 36 年間で、日本語教育機関は 14.1 倍、日本語教師数は 15.6 倍、そして学習者数は 28.7 倍と大幅に増加している(国際交流基金 2015)。日本語教育が盛んに実施されている国としては、主に韓国や中国などの東アジアが挙げられる。

韓国での日本語教育は、学習者人口の約 8 割が中学生・高校生で進学のための日本語学習が主な目的である。一方で、高等教育や一般成人教育では、就職や昇進が目的の社会的・経済的な要因が主である。その他にも、韓国では民間の教育機関や学院等での日本語教育も盛んに行われている。しかし、多くの学習要因が自己の進路や将来のためである場合が多く、日本社会や文化による要因は未だに少数である(国際交流基金 2015)。

1.2 本研究の動機と目的

筆者は以前、アジア圏で実施されている日本語教育を自分の目で観察し体験するため、韓国の釜山にある大学に約 10 か月間留学した。留学中に韓国人日本語学習者と日本語で会話する機会が多々あり、時々であるもののザ行音がジャ行音に聞こえることに気が付いた。その際に、「韓国人日本語学習者はザ行音とジャ行音を発音する場合、それぞれの違いを意識して発音しているのか」また「日本語母語話者が発音したザ行音とジャ行音の聞き分けは出来ているのか」について関心を持った。

1) 国際交流基金では、日本語教育の現状を把握し日本語教育に貢献するため、1974 年から「海外日本語教育機関調査」を実施している。また、この調査での対象は「語学教育として日本語を教えている学校やその他の機関」である。そのため、異文化交流活動等が主目的で語学教育を実施していない機関やテレビ・ラジオ・書籍・雑誌・インターネットなどを使用し、日本語を独習している学習者は総数には含まない。

本研究では、韓国人日本語学習者が聞き取りにおいて、語頭に現れるザ行音とジャ行音の区別ができているのかを明らかにすることを目的とする。

第2章 先行研究

本章においてはまず、韓国人日本語学習者の聞き取りにおけるザ行音とジャ行音の識別についての先行研究を読み、どのような結果が出ているかを見ていきたい。そして、それらの研究の結果と残された課題を踏まえ、本研究の研究課題を設定する。

2.1 聞き取りによる調査

中東(1998)は、語頭における有声音と無声音の聞き分けは困難であるが、語中の場合は困難でないと述べている。また、韓国語の破擦音「ㅈ」/j/は語の位置によって発音が変化する。例えば、語頭においては[tc]であるが、語中では[dz]となる傾向が強くみられる。しかし、韓国語には日本語の[dz] [z] が存在しないため、日本語のザ行音とジャ行音の区別が難しいと指摘されている。

さらに、韓国人の大学生を対象に聞き取り調査を行った結果、ジを除いたザ行音の平均正答率は51.2%であるのに対して、ジを含む語の正答率は67.2%であることが明らかになった。この結果から、韓国人日本語学習者にとって、ジ以外のザ行音の識別が困難であることがわかる。

しかし、中東の研究においては、/z(j)V/、/zi/、/ci/、/si/の調査語の比較が同じ語数で行われていない等の調査方法上の問題点も見られる。

次に、二ノ宮他(2010)では、日本語能力試験のN1を取得した韓国人日本語学習者20人を対象に、ザ行音とジャ行音の聴取能力と発話能力の関連性を調査した。聴取テストでは、調査協力者に20回「ザ」と「ジャ」をランダムに並べたものを聞いてもらい、聞こえた方に○をつけてもらう方法で行った。聴取テストの結果、

20 点満点中平均点は 16.8 点で、20 人中 18 人が 15 点以上の高得点群に属していた。このことから、ザとジャを聞き分けていることがわかった。

許(2003)は、ザ行音とジャ行音の発話能力で分けた上級の韓国人日本語学習者を、さらに上位群と下位群 12 名ずつに分け、無意味語を使用した日本語のザ行音とジャ行音の聞き分けテストを実施している。その結果、刺激音全体の聴取正確度は上位群が 81%、下位群が 66%で有意差が見られた。また、ザ行音とジャ行音の聴取正確度においても、上位群が 84%(ザ行音)と 79%(ジャ行音)、下位群が 68%(ザ行音)と 64%(ジャ行音)で各群の間で有意差が見られた。この結果から、両群ともザ行音の聞き取り能力の方が高いとみなせる。論文では、散布図からジャ行音は下位群の方が上位群より高いと主観的に述べているものの、掲載された平均を見ると、ジャ行音に関しては上位群 79%、下位群 64%となり、上位群が高いことがわかる。

2.2 聴覚音声学の観点

丸島他(2011)は、MMN²⁾・N2 b³⁾・P 300⁴⁾の 3 種の ERP 成分を使用し、韓国人日本語学習者のザ行音とジャ行音の識別について脳波実験と聴取テストを行っている。その結果、韓国人日本語学習者は意識的にザとジャの音を識別できてはいないものの、無意識の中で音の物理的な差異を判別している可能性が見られた。また、聞き取りテストで満点を取った場合でも、ザとジャの識別の迷いを感している可能性があることがわかった。

福盛(2004)は、P 300 を使用してザとジャの識別に関して、丸島他(2011)と同

2) MMN(Mismatch negativity:ミスマッチ陰性電位)とは、無視条件下(inattend condition)のオドボール課題で得られた低頻度刺激の波形から標準刺激の波形を引算した際に現れる ERP 成分のことであり、潜時 100~200ms に出現する陰性電位のことであり、ERP 成分とは、事象関連脳電位のことであり単語を弁別している時に観測される(丸島他 2011:16)。

3) N2b とは、注意条件下(attend condition)のオドボール課題で得られた低頻度刺激の波形から標準刺激の波形を引算した際に現れる ERP 成分のことであり、潜時 200~300ms に出現する陰性電位のことであり(丸島他 2011:16-17)。

4) P300 とは、低頻度刺激の波形から標準刺激の波形を引算した際に現れる正中中部(特に頭頂部)優位の ERP 成分のことで、潜時 300~400ms に出現する陽性電位のことであり(丸島他 2011:17)。

様に脳波実験と聴取テストを実施している。この結果から、聴取テストで高得点を獲得した学生は日本人の識別能力と差がないことがわかった。また、聴取テストで満点でない場合も P 300 の出現によりザとジャの識別がほぼできるということが明らかになった。

2.3 先行研究の欠点

以上に述べた先行研究には、様々な欠点がある。まず、聞き取りによる調査の中東(1998)では、韓国語母語話者の英語音声と日本語音声の特徴について述べられているが、人数や学習歴等のインフォーマントの条件に偏りがあった。また、比較している語数に差があったため、語数は全て等しくする必要がある。統計的な検定が行われていない点に関しても、結果に説得力を持たせるために統計的な検定を行う必要がある。

最後に、丸島他(2011)では、研究結果の点数分類方法に不備がある。論文内での点数分類は「15点以下」「19～16点」「20点満点」の3種類に分類されていた。しかし、「19～16点」と「15点以下」の幅が狭いため、点数の分類方法を変える必要があると考えられる。加えて、統計的な検定の対応のない *t* 検定を行う必要もあった。

また、丸島他(2011)、福盛(2004)ともに、調査協力者に関する情報として、滞日情報や日本語のレベル表記に不備があった。

2.4 本研究の課題

本研究で取り組む課題は、以下の4点である。

1. ザ行音とジャ行音は韓国人日本語学習者の日本語レベルによって聞き取りに差があるのか。
2. ザ行音とジャ行音の間に聞き取りの差はあるのか。
3. ザ行音の間に聞き取りの差はあるのか。
4. ジャ行音の間に聞き取りの差はあるのか。

以下、一つひとつの課題に対して、調査結果を述べていく。

第3章 調査の方法と分析

本章では、データの収集の手続きと調査方法、調査協力者の情報と分析方法について述べる。

3.1 調査

本研究では、韓国人日本語学習者が日本語のザ行音とジャ行音の聞き分けが出来ているかを明らかにすることが目的であるため、あらかじめ録音した日本語の音声を対象資料として、韓国人日本語学習者に聞き分けてもらった。

詳細な手順は以下の通りである。

1) 調査方法

全180問、約10分間の聞き取り調査を実施した。筆者他2名が発音したザ行音を含む語、ジャ行音を含む語、ダミー音をランダムに流し、問題用紙にある2択の語のうち聞こえた方に○をつけてもらった。調査語として、以下の5種に該当する語(人工語も含む)を用いた。

1. 語頭のザ行音(ザ、ズ、ゾ)+母音(/a/, /i/, /u/, /e/, /o/) 15音

(例) ざあく、ずい、ぞうだん

2. 語頭のジャ行音(ジャ、ジュ、ジョ)+母音(/a/, /i/, /u/, /e/, /o/) 15音

(例) じゃあく、じゅい、じょうだん

3. 語頭のザ行音(ザ、ズ、ゾ)+9種の日本語子音(/k/, /g/, /s/, /z/, /n/, /h/, /b/, /m/, /r/) 135音

(例) ざかるた、ずがく、ぞさ

4. 語頭のジャ行音(ジャ、ジュ、ジョ)+9種の日本語子音(/k/, /g/, /s/, /z/, /n/, /h/, /b/, /m/, /r/) 135音

(例) じゃかるた、じゅがく、じよさ

5. ダミー音 8音

(例) さとう、ちゅき

2) 音声資料録音者

日本語母語話者である男性1名、女性2名で録音した。問題ごとの聞き取りの差を小さくするため、1から180の数字を読む女性1名、ザ行音とジャ行音、ダミー音を読みあげる役割を男性1名女性1名の計3名で行った。問題内容は男性女性が交互に読み上げた。

3.2 調査協力者

調査項目180問を日本語母語話者13名に聞いてもらい、判定結果が一致することを調査前に確かめた。

本節では、調査協力者である韓国人日本語学習者43名(初級34名、中級9名)について述べる。学習者のレベル分けは、調査協力大学の日本語クラスの学年に基づいて行った。

<表 1> 調査協力者

出身地域	出身地	人数
忠清道	大田	1
京畿道	ソウル/仁川/世宗	5
江原道	記入無し	2
慶尚道	浦項/釜山/蔚山/金海/梁山	32
全羅道	光州	1
記入無し	記入無し	1

表 1 は、本調査に協力してもらった韓国人日本語学習者 34 名の出身地を表している。韓国は大きく分けて(1)忠清道、(2)京畿道、(3)江原道、(4)慶尚道、(5)全羅道の 5 地域に分類できるが、今回の調査では慶尚道の出身者が一番多かった。

3.3 分析方法

本調査では、まずザ+子音、ズ+子音、ゾ+子音とジャ+子音、ジュ+子音、ジョ+子音に関して、得られたサンプルからそれぞれの母集団が正規分布をしているとみなせるかどうかを判断するために正規性の検定⁵⁾を行った。正規性の検定を行った結果、*p* 値の値は以下の通りであった。

<表 2> 正規性の検定の結果

	ザ+子音	ズ+子音	ゾ+子音	ジャ+子音	ジュ+子音	ジョ+子音
<i>p</i> 値	0.004	0.265	0.432	0.265	0.265	0.265
母集団が正規分布をしているか	×	○	○	○	○	○

表 2 から、「ザ+子音」以外が *p* 値 > 0.05 であり、母集団が正規分布をしているとみなすことができた。しかし、「ザ+子音」のみ *p* 値 = 0.041 (< 0.05) であるため、正規分布をしていると判定できなかった。そのため、「ザ+子音」に関しては、パラメトリック検定ではなく、ノンパラメトリック検定を行った。

次に、調査対象の、対応するザ行音とジャ行音のそれぞれの母集団の分散が等しいとみなせるかどうかを見るために等分散性を見るバートレット検定⁶⁾を行った。

5) データの母集団が正規分布に従っているかどうかを調べるための検定のことである。

＜表3＞等分散性の検定の結果

	ザとジャ	ズとジュ	ゾとジョ
<i>p</i> 値	0.613	0.373	0.162
等分散性の有無	○	○	○

その結果、それぞれの *p* 値 > 0.05 であることから、対応するザ行音とジャ行音のそれぞれの母集団の分散が等しいとみなせることがわかった。

本論文での4点の課題に対する分析方法は以下の通りである。

- 1) 学習者の日本語レベルによる聞き取りの差
→ 対応のない *t* 検定⁷⁾を行った。
- 2) ザ行音(ザ、ズ、ゾ)間の聞き取りの差
→ 一要因参加者内分散分析⁸⁾を行い、有意であった場合、更に LSD・Bonferroni・Holm の3種の多重比較を行う。
- 3) ジャ行音(ジャ、ジュ、ジョ)間の聞き取りの差
→ 一要因参加者内分散分析を行い、有意であった場合、更に LSD・Bonferroni・Holm の3種の多重比較を行う。
- 4) ザ行音とジャ行音間の聞き取りの差
→ 3)と同様に、一要因参加者内分散分析を行う。

第4章 結果と考察

本章では、前述の4点の研究課題に対しての分析結果と考察を述べる。

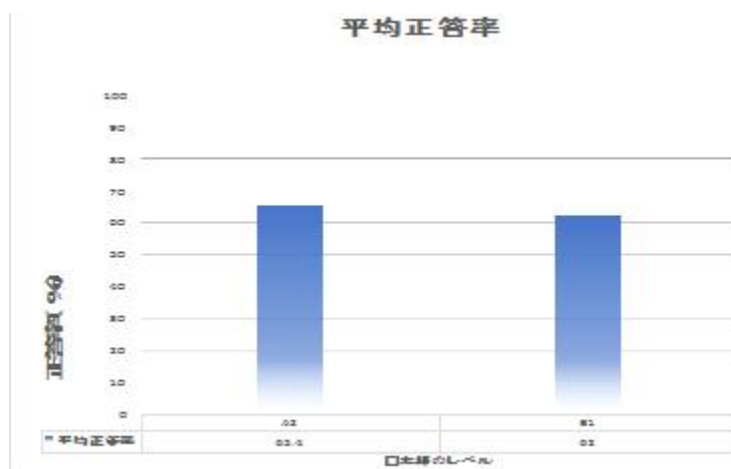
4.1 学習者の日本語レベルによる聞き取り能力の差

まず、初級クラスと中級クラスの平均を算出する。

6) 母集団間や因子水準間の分散の同等性を検定する方法である。

7) 母集団が正規分布に従うと仮定した上で行う。また、対応のない *t* 検定とは、2つの独立した母集団があり、それぞれの母集団から抽出した標本の平均に差があるかどうかを検定することである。

8) 分散分析とは、3群以上からなるデータの母平均の差を検定する検定方法である。



< 図 1 > 初級と中級の平均 (A2=初級、B1=中級)

図 1 より、初級のほうが中級より平均点が 3 点ほど高くなったが、これが統計的に有意な差なのかどうかを明らかにするために、対応のない t 検定を行った。

< 表 4 > 対応のない t 検定 (初級と中級の得点)

	初級	中級
平均	65.34705882	62.03333333
分散	57.77165775	232.7075
観測数	34	9
仮説平均との差	0	
自由度	9	
t	0.63126534	
$P(T \leq t)$ 片側	0.271782215	
t 境界線 片側	1.833112933	
$P(T \leq t)$ 両側	0.54356443	
t 境界線 両側	2.262157163	

両側検定の p 値 = 0.54356443 で 0.05 より大きいので、統計的に有意な差があるとはいえないことがわかった。効果量 (f) は 0.60 で効果量は大となった。よって、初級から中級の間では、聞き取り能力における差はないということがわかった。つまり、記述統計における平均値の差の約 3 点はたまたまそうなのであり、統計的には初級から中級にかけて日本語の授業のレベルによる違いはあるものの、聞き取り能力は伸びていないということを表している。よって、以下の分析では初級と中級の調査協力者を同一レベルの学習者とみなし、同じグループとみなして分析を進めることにする。

4.2 ザ行音(ザ、ズ、ゾ)間の差

まず、ザ+子音、ズ+子音、ゾ+子音それぞれの正答率をまとめ、平均正答率を出した。本研究では、アンケート作成に関してミスが見つかり、問題中に入らない子音がいくつか見つかった。そのため、一要因参加者内分散分析を行う前に、正答率が2つ以上出ている子音(k、s、n、h、r)の5つのみを分析対象とし、分析を行った。

＜表5＞ザ行音(ザ、ズ、ゾ)間の平均正答率)

	ザ+子音	ズ+子音	ゾ+子音	平均
k	0.473	0.698	0.62	0.597
s	0.5	0.814	0.605	0.639666667
n	0.372	0.893	0.644	0.636333333
h	0.496	0.872	0.674	0.680666667
r	0.636	0.8835	0.6745	0.731333333
平均	0.4954	0.8321	0.6435	0.657

表5からズ+子音の平均正答率が0.8321と最も高いが、統計的に差があるのかを見るために、一要因参加者内分散分析を行った。

＜表6＞一要因参加者内分散分析(ザ行音間)

== Analysis of Variance

S.V	SS	df	MS	F
.....				
subj	0.0312	4	0.0078	
.....				
A	0.2848	2	0.1424	33.06**
sxA	0.0345	8	0.0043	
.....				
Total	0.3505	14		*p<.10**p<.05***p<.01

F値=33.06で*が2つ付いているため、1%水準で統計的に有意な差があることがわかった。効果量(η^2)は0.09で、効果量は中であった。

さらに、有意差が出たことから多重比較を行った。

<表 7> ザ行音(ザ、ズ、ゾ)間の多重比較

```

===== Multiple Comparisons by LSD =====
(MSe=      0.0043, *p<.05)
(LSD=      0.0957)

.....

A1 <  A2  *
A1 <  A3  *
A2 >  A3  *

.....

===== Multiple Comparisons by Bonferroni =====
(MSe=      0.0043, *p<.05, alpha'=0.0167)
(BONF=     0.1252)

.....

A1 <  A2  *
A1 <  A3  *
A2 >  A3  *

.....

-- Multiple Comparisons by Holm --

(MSe=      0.0043, *p<.05)

-----

A1 <  A2  *   (alpha'= 0.0167)
A1 <  A3  *   (alpha'= 0.0500)
A2 >  A3  *   (alpha'= 0.0250)

-----
    
```

ザ行音は韓国語の音韻体系になく対照分析の予測では難しいということが予測される。しかし、実証的に調査、分析するとそれが支持されなかった。多重比較の結果から特にズは易しく、平均値から判断すると、ズ>ゾ>ザの順で聞き取りが易くなっていることが明らかになった。

4.3 ジャ行音(ジャ、ジュ、ジョ)間の差

ザ+子音、ズ+子音、ゾ+子音それぞれの正答率をまとめ、平均正答率を出した。ジャ行音の問題中にも足りない子音がいくつか見つかったため、ザ行音の時と同様、一要因参加者内の分散分析を行う前に、正答率が2つ以上出ている子音(k、g、s、z、d、n、h、b)の8つで分析を行った。

＜表8＞ジャ行音(ジャ、ジュ、ジョ間の平均正答率)

	ジャ+子音	ジュ+子音	ジョ+子音	平均
k	0.698	0.721	0.570	0.663
g	0.5	0.628	0.488	0.539
s	0.593	0.721	0.500	0.605
z	0.69	0.756	0.558	0.668
d	0.6823	0.640	0.593	0.638
n	0.7675	0.8216	0.663	0.751
h	0.6045	0.783	0.651	0.68
b	0.7053	0.682	0.527	0.638
平均	0.655	0.719	0.569	0.648

表8の結果から、ジュ+子音、ジャ+子音、ジョ+子音の順で平均正答率が高いことがわかった。次に、これ統計的に有意な差があるのかを明らかにするため、一要因参加者内分散分析を行った。

＜表9＞一要因参加者内分散分析(ジャ行音間)

== Analysis of Variance ==

S.V	SS	df	MS	F

subj	0.0786	7	0.0112	

A	0.0911	2	0.0455	19.85 **
sxA	0.0321	14	0.0023	

Total	0.2017	23		+p<.10 *p<.05 **p<.01

F値=19.85 で*が2つ付いているため、1%水準で統計的に有意な差があることがわかった。効果量 (η^2) は0.39で、効果量は大であった。

次に多重比較を行った。

```

== Multiple Comparisons by Holm ==
(MSe=      0.0023, * p<.05)      167)
-----
A1 < A2 * (alpha'= 0.0500)
A1 > A3 * (alpha'= 0.0250)
A2 > A3 * (alpha'= 0.0167)
-----

```

<表 10> ジャ行音(ジャ、ジュ、ジョ)間の多重比較

多重比較の結果、ジャとジュにおいて Bonferroni では ns (not significant) の判定であるため、統計的な有意差は出ていない。しかし、他の二つの多重比較の結果は有意な差が出ている。ジュ>ジャ>ジョの順で聞き取りが易しく、ジャとジュとジョの難易度には差があることが明らかになった。ジャ行音は、韓国語の音韻体系に存在する音にも関わらず、ジュ>ジャ>ジョの順で聞き取りが易しいことがわかった。

4.4 ザ行音とジャ行音の間の聞き取りの差

ザ行音とジャ行音で共通して問題内にあった4つの子音(k、s、n、h)で分析を行った。はじめにザ+子音とジャ+子音から分析する。

<表 11> 平均正答率(ザ、ジャ)

	ザ+子音	ジャ+子音
k	0.473	0.698
s	0.5	0.593
n	0.372	0.7675
h	0.496	0.6045

表 11 から、どの子音でも「ザ+子音」より「ジャ+子音」の方の平均正答率が高くなっていることが分かる。つまり、対照分析の予測通り母語にない子音「ザ+子音」の方が難しく、母語にある子音「ジャ+子音の方が聞き取りは易しいということがいえよう。

しかし、「ザ+子音」と「ジャ+子音」の間に統計的に有意な差があるかどうかを見るために一要因参加者内分散分析にかけた。

<表 12>一要因参加者内分散分析(ザ、ジャ)

== Analysis of Variance ==

S.V	SS	df	MS	F
subj	0.0020	3	0.0007	
A	0.0845	1	0.0845	8.66 +
sxA	0.0293	3	0.0098	
Total	0.1157	7		+p<.10 *p<.05 **p<.01

F 値=8.66 で、判定に+マークが付いていることから、統計的に有意傾向($p<0.10$)があることが明らかになった。効果量 (η^2) は0.02 で、効果量は小であった。つまり、統計的には有意な差があるとはいえないが、その傾向、母語にない子音「ザ+子音」よりも母語にある子音「ジャ+子音」の方が聞き取りは易しいという傾向があることがわかった。

次に「ズ+子音」と「ジュ+子音」を分析する。

<表 13>平均正答率(ズ、ジュ)

	ズ+子音	ジュ+子音
k	0.698	0.721
s	0.814	0.721
n	0.893	0.8216
h	0.872	0.783

表 13 から、「子音 k」の場合だけ、「ズ+子音」よりも「ジュ+子音」の方の平均正答率が高かった。逆に、「子音 s、n、h」の場合は、「ズ+子音」よりも「ジュ+子音」の方の平均正答率が高いことがわかった。

次に統計的に有意な差があるのかを見るため、一要因参加者内分散分析を行った。

<表 14>一要因参加者内分散分析(ズ、ジュ)

== Analysis of Variance ==

S.V	SS	df	MS	F
subj	0.0258	3	0.0086	
A	0.0066	1	0.0066	4.46 ns
sxA	0.0045	3	0.0015	
Total	0.0369	7		+p<.10 *p<.05 **p<.01

以上から、 F 値=4.46 で、判定が ns(not significant)であるため、統計的に有意な差があるとはいえないことが明らかになった。効果量 (η^2) は 0.70 で、効果量は大であった。つまり、「ズ+子音」と「ジュ+子音」の間には、表 13 の平均正答率では子音 k, s, n, h で少々の差が出ているものの統計的には差があるとはいえず、「ズ+子音」と「ジュ+子音」に関しては同じ程度の聞き取り能力があるといえよう。対照分析の観点から述べると、韓国人日本語学習者の母語にある音「ジュ」でも、ない音「ズ」でも、聞き取りに関してはどちらも同じ程度にでき、差がないということになる。母語にある音は聞き取りが易しい、ない音は難しいという対照分析の予測は当たらないことが明らかになった。

最後にゾ+子音とジョ+子音の分析を行う。

<表 15>平均正答率(ゾ、ジョ)

	ゾ+子音	ジョ+子音
k	0.62	0.570
s	0.605	0.500
n	0.644	0.663
h	0.674	0.651

表 15 から、「子音 n」の場合だけ、「ゾ+子音」よりも「ジョ+子音」の方の平均正答率が高かった。一方で「子音 k, s, h」の場合は、「ジョ+子音」よりも「ゾ+

子音」の方の平均正答率が高いことがわかった。この結果は興味深く、韓国人学習者の母語にない音「ゾ+子音」の方が、母語にある音「ジョ+子音」よりも平均正答率が高いことが明らかになった。これも対照分析の予測と逆の結果になった。

次に、統計的に本当に有意な差があるのかどうかを見るため、一要因参加者内分散分析を行った。

<表 16>一要因参加者内分散分析(ゾ、ジョ)

-- Analysis of Variance --

S.V	SS	df	MS	F
subj	0.0161	3	0.0054	
A	0.0032	1	0.0032	2.34 ns
sxA	0.0040	3	0.0013	
Total	0.0233	7		+p<.10 *p<.05 **p<.01

F 値=2.34で、判定が ns(not significant)となっているので、統計的に有意な差があるとはいえないことが明らかになった。効果量 (η^2) は 0.69 で、効果量は大であった。つまり、記述統計上は差があるように見えるが、統計的な検定にかけると有意な差はなく、「ゾ+子音」と「ジョ+子音」は同じ程度の聞き取り能力があるといえよう。対照分析の観点から述べると、韓国人日本語学習者の母語にある音「ジョ」でも、ない音「ゾ」でも、聞き取りに関してはどちらも同じ程度にでき、差がないということになる。母語にある音は聞き取りが易しい、ない音は難しいという対照分析の予測は、「ジョ」と「ゾ」の間では当たらないことが明らかになった。

第5章 結論と今後の課題

第5章では、これまでの研究課題に対する結果をまとめ、今後の課題を述べることにする。

5.1 まとめ

韓国人日本語学習者における日本語のザ行音とジャ行音の調査から、以下のことが明らかになった。まず、本研究での課題4点を再度以下に記す。

<研究課題1> ザ行音(ザ、ズ、ゾ)とジャ行音(ジャ、ジュ、ジョ)は韓国人学習者の日本語レベルによって聞き取り力に差があるのか

まず、韓国人日本語学習者によるザ行音とジャ行音の聞き取り力には、対応のない *t* 検定を行なった結果、初級から中級の間で差はないことがわかった。つまり、初級から中級にかけての日本語の授業のレベルには差があるものの、初級から中級の間では聞き取り能力に差はなく、伸びていないことが明らかになった。

<研究課題2> ザ行音の間に聞き取りの差はあるのか

一要因参加者内分散分析にかけた結果、1%水準で統計的に有意な差があることがわかった。多重比較を行った結果、ザ行音(ザ、ズ、ゾ)の間に有意な差が見られ、ズ>ゾ>ザの順で聞き取りが易しく、聞き取りの難易度に差があることがわかった。対照分析の予測では、ザ行音は韓国語の音韻体系にないため難しいとされていたが、ザ行音(ザ、ズ、ゾ)の間での聞き取りの差に関してはズがゾより有意に易しく、ゾがザより有意に易しく、対照分析での予測と異なる結果が見られた。

<研究課題3> ジャ行音の間に聞き取りの差はあるのか

一要因参加者内の分散分析を行った結果、1%水準で統計的に有意な差があることがわかった。多重比較を行った結果、LSDとHolmの多重比較で有意な差が出ているため、ジャ行音(ジャ、ジュ、ジョ)の間に有意な差が見られ、ジュ>ジャ>ジョの順で聞き取りが易くなっており、ジャ行音(ジャ、ジュ、ジョ)の間には難易度階層があることが明らかになった。韓国語の音韻体系に存在する音の間にも、聞き取りの難易度に大きな差があった。

<研究課題4> ザ行音とジャ行音の間に聞き取りの差はあるのか

まず「ザとジャ」は統計的に有意傾向にあることがわかった。母語にある音(ジャ+子音)の方が母語にない音(ザ+子音)より易しい傾向があることが明らかになり、対照分析の予測がほぼ支持された。

次に「ズとジュ」に関しては、統計的な有意な差があるとはいえ、学習者は「ズ+子音」と「ジュ+子音」の2つに対して同じ程度の聞き取り能力を持っていることがわかった。つまり、母語にある音は聞き取りが易しい、ない音は難しいという対照分析の予測は当たらなかった。

最後に「ゾとジョ」に関しては、統計的に有意な差があるとはいえ、「ゾ+

子音」と「ジョ+子音」の2つに対しての聞き取り能力は差がないことが明らかになった。つまり、「ゾとジョ」の聞き取りに関しても、母語にある音は聞き取りが易しい、ない音は難しいという対照分析の予測は当たらない結果となった。

以上の結果から、韓国人は日本語の「ザとジャ」に関しては、区別が出来ることがわかった。しかし、「ズとジュ」「ゾとジョ」は、区別ができておらず対照分析の予測にも反していることが明らかになった。

5.2 今後の課題

今回は語頭におけるザ行音とジャ行音の聞き取り (comprehension) の研究を行った。今後は語中や語末における聞き取りや、ザ行音とジャ行音の産出 (production) に注目した研究も行っていきたい。また、韓国語の方言が日本語のザ行音とジャ行音の習得の際に、何らかの影響を持っているのかについても研究をしていきたい。なお、音声資料作成やアンケート作成の際に様々な不注意によるミスが散見されたため、アンケート作成にはより一層慎重に取り組む必要があることを深く認識させられた。

【参考文献】

- 李炯宰(1991)「韓国人の日本語学習者の音声教育に関する研究—発音および聞き取り上の問題を中心に—」『日本語と日本文学』12号、筑波大学、pp. 21-38.
- 稲葉継雄(1978)「韓国人の日本語学習における困難点—発音を中心として—」『外国人と日本語』4号、pp. 63-78.
- 井下田貴子・荒井隆行(2011)「韓国人日本語学習者の外来語発音における問題点と日本語母語話者の聴覚及び語彙認識に関する一考察」『日本文化研究』37号、東アジア日本学会.
- 加納尚之・川村尚生・井上倫夫・中島健二・介中敦子(1997)「事象関連脳電位 (ERP) を用いたコミュニケーションエイド」『電子情報通信学会技術研究報告、HCS、ヒューマンコミュニケーション基礎』97号、一般社団法人電子情報通信学会、pp. 57-64.
- 中東靖恵(1998)「韓国語母語話者の英語音声と日本語音声—聞き取り・発音調査の結果から—」『音声研究』第2巻第1号、日本音声学会、pp. 77-82.
- 二ノ宮崇司・丸島歩・桐越舞・渡辺和希・早川友里恵・福盛貴弘(2010)「韓国人日本語学習者による「ザ行音」「ジャ行音」の聴取・発話能力の関連性」『言語学論叢オンライン版』3、筑波大学応用言語学研究室、pp. 57-73.
- 福盛貴弘(2004)「朝鮮語母語話者における「ザ」と「ジャ」の識別に関する聴覚音声学的研究—P 300を援用した日本語学習者に音声面での評価について—」『茨城大学留学センター紀要』2号、茨城大学留学センター、pp. 61-72.
- 許舜貞(2003)「上級日本語学習者の「ザ行音」及び「ジャ行音」の習得—韓国語母語話者の場

- 合一」『第 17 回日本語音声学会全国大会予稿集』、日本音声学会、pp. 201-206.
- 松崎寛(1999)「韓国語話者の日本語音声—音声教育研究の観点から—」『音声研究』第 3 卷第 3 号、日本音声学会、pp. 26-35.
- 丸島歩・桐越舞・二ノ宮崇司・渡辺和希・早川友里恵・福盛貴弘(2011)「韓国人日本語学習者における「ザ/ジャ」音の識別—MM N、N 2 b、P 300 を指標として—」『実験音声学・言語学研究』3 号、pp. 12-29.
- 国際交流基金「海外の日本語教育の現状 2015 年度日本語教育機関調査より」：
https://www.jpfi.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2015/text.pdf(検索日 2018. 09. 25.)
- 国際交流基金「日本語教育 国・地域別情報」『韓国(2016 年度)』：
<https://www.jpfi.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/korea.html>(検索日 2018. 9. 25.)

논문 투고 일자 : 2018. 10. 14.
논문 심사 일자 : 2018. 11. 07.
게재 확정 일자 : 2018. 11. 09.

 <要旨>

 韓国人日本語学習者における日本語のザ行音とジャ行音の習得について
 一聞き取り調査を通して一

藤田蘭子

本論文では、韓国人日本語学習者の日本語のザ行音(ザ、ズ、ゾ)とジャ行音(ジャ、ジュ、ジョ)の習得を聞き取りの面から調査、分析した。大学生を対象に聞き取り調査を実施し、得られた結果を実証的に分析した。本論文の研究課題は、(1)ザ行音とジャ行音は韓国人日本語学習者の日本語レベルによって聞き取りに差があるのか(2)ザ行音(ザ、ズ、ゾ)の間で聞き取りに差はあるのか(3)ジャ行音(ジャ、ジュ、ジョ)の間で聞き取りに差はあるのか(4)ザ行音とジャ行音の間で聞き取りに差はあるのかの4点である。

分析の結果、以下のような結果が得られた。(1)初級から中級にかけては、聞き取り能力に差がなく伸びていない。(2)韓国語の音韻体系にないザ行音(ザ、ズ、ゾ)の間で有意な差があり、ズ>ゾ>ザの順で聞き取りが易しい。(3)韓国語の母語に存在するジャ行音(ジャ、ジュ、ジョ)の間で有意な差がみられ、ジュ>ジャ>ジョの順で聞き取りが易しい。(4)ザ行音とジャ行音の間では、ズとジュ、ゾとジョの間でのみ有意な差があった。ズ>ジュ、ゾ>ジョの順で平均点が高く、学習者の母語にないザ行音の方が母語にあるジャ行音より聞き取りができることが明らかになった。

以上の結果から、日本語のザ行音とジャ行音の聞き取りの習得に関して、韓国語と日本語の対照分析で予測される結果とは異なることが実証的に明らかになった。

An Empirical Study of the Acquisition of the
 Japanese “Za-gyō-sounds” (za, zu, and zo) and “Ja-gyō-sounds” (ja, ju, and jo) by Korean learners.

Fujita, Ranko

This paper empirically investigates and analyzes the acquisition of the Japanese “Za-gyō-sounds” (za, z u, and zo) and “Ja-gyō-sounds” (ja, ju, and jo) by Korean learners.

There are four research questions addressed here: (1) Do Za-gyō-sounds and Ja-gyō-sounds differ in how they are heard by Korean learners depending on their Japanese proficiency level?, (2) is there a significant difference among the Za-gyō-sounds (za, zu, and zo) as heard by Korean speakers?, (3) is there a significant difference among the Ja-gyō-sounds (ja, ju, and jo) as heard by Korean speakers?, and (4) is there a difference between the Za-gyō-sounds and Ja-gyō-sounds as heard by Korean speakers?

The following results were obtained: (1) There was no difference in the hearing ability between Korean learners of Japanese at the beginner and intermediate levels, (2) there was a significant difference among the Za-gyō-sounds (za, zu, and zo), (3) there was also a significant difference among the Ja-gyō-sounds (ja, ju, and jo), and (4) there was no statistically significant difference between the Za-gyō-sounds and Ja-gyō-sounds but there were significant differences between zu and ju and between zo and jo.

From these results, I have empirically demonstrated that the acquisition of Japanese Za-gyō-sounds and Ja-gyō-sounds is different to those predicted in the contrastive linguistic analysis of Korean and Japanese.